

## 「基礎・基本の力」をつける

前富山大学教授 安藤 修平 あん どう しゅうへい

一 国語科の基礎・基本を考えるために  
 なぜ、今「基礎・基本」と言われるのでしょうか。国語科の「基礎・基本」を考えるための第一歩はこのことに対応することから始めましょう。「基礎・基本が身につけていなければそれを応用することもできないではないか。」とおっしゃると思います。が、「では、なぜ今なのですか?」それは、科学技術などが急速に進歩するこの時代に、「この先役立つのは『基礎・基本』しかないからでしょうか。」と返ってくれば、さすがだと思えます。

そのつえ、国語科はすべての教科の「基礎・基本」と言われますから、国語力の低下が叫ばれる昨今、子どもたちの将来のためにも、国語科の「基礎・基本」を今まで以上にしっかりと身につけさせなければならぬと思います。この思いを今までの十倍くらいアップしてほしいのです。必要感が乏しければ何事も成功しません。

### 二 国語科における「基礎・基本」の問題点

#### 国語科の「基礎・基本」とは

国語科の「基礎・基本」を身につけさせるために、まず考えておきたいことは「国語科の基礎・基本とは何か」ということではないでしょうか。いや、それがあまりはつきりしないのですが、「という音が聞かなくてききとってですね。文部科学省は『学習指導要領』に書かれているものがそつだ」という説明ですが、『学習指導要領』を最低基準だとすれば当然そうなりますね。国語科の学力構造も示されていますから、これが「基礎・基本」だと言われても本当にそつかという疑問もありますが、今のところはほかにありませんから、これでいくことにしましょう。今後は、何が「基礎・基本」かを、教室の事実で検証していくのがいちばんだと思います。

#### 教室の学習と「基礎・基本」

次の問題は、教室での学習が「基礎・基本」を身につけさせるように工夫されているかということです。例えば、三年(下)の「ちいちゃんのかげおくり」を見てみましょうか。

まず、「学習の手引き」の二二四には、次のように書かれています。「この物語には、はじめに、家族がみんなである『かげおくり』の場面があり、終わりのほうに、ちいちゃんか一人である『かげおくり』の場面があります。二つの場面をくらべて、感じたことを話し合ひましょう。」「どの教室でもこの問題を取り扱つことと思いますが、「感じたことを話し合ひましょう。」「というのが曲者です。子どもたちへの尋ね方としてはこれでよいかと思いますが、たくさん本を読んでいる子はいざ知らず、多くの子は何にいついてどう答えればよいかとまよっているように見えます。終わりのほうのかげおくりでちいちゃんが死んだのだと思う。「どこか意見が出た。それは思わぬ。」「という意見との間で大論争になったりするわけです。確かに活発な話し合ひではあります。しょうが、「基礎・基本」の力をつけさせるといふ立場からは「これは困りますね。」

そこで役立てて欲しいのが「学習の窓」なのです。場面を比べるとこのことは「表現の違い」「気づきその意味を考えること」です。「学習の窓」ではそれを「言葉の使い方」に気がつけて読む」と表したのです。そして具体的な表現(青い空からいつてきました。))を示しています。具体的表現を示したのは、できるだけ、子どもたち一人ひとりの力でという思いからなのですが、「答えになつていない。」「と心配する先生もおられると聞いています。確かにそつかもしれませんが、「あ、そつか。」「いついつた(言葉)を見つければいいんだ。」と気づいてほしいことと、そつて、その言葉のもつ意味を「わたし」は「こつ考えてみよう」というふうな学習を進めてほしいと

「基礎・基本の力」をつける

いう願いからこぼれているのです。

「基礎・基本」の力とは、具体的表現を見つける力、そしてその表現の意味をとらえる力です。思いつきを出し合ってわいわいしゃべることではありません。さらに言えば「この言葉の使い方」に気をつけて読む「は」この教材だけではなく多くの教材でも役立つことができませんし、また、四年(下)の「一つの花」の、大事な言葉に気をつけて、そして六年(下)「海の命」の、人物の言葉や行動に注目して「に結び付いていきます。」

「学習活動」と「基礎・基本」のかかわり

次に、子どもたちが夢中になる「学習活動」と「基礎・基本」のかかわりを、六年(上)「森へ」の場合について考えてみましょう。

この「森へ」の学習は、通読の後、最も心に残った場面とその理由を発表し合う「こと」になるでしょう。とすれば、子どもたちは「心に残った場面を選び、その理由を述べる」ことができればなりません。「ここで問題なのは、「心に残った場面」の「理由」です。多くの子は「何となく」という理由であり、的確にその理由を挙げることはできないのではないでしょうが。だから絵や音楽や光などの形で表現させるといった方法で学習を展開しようとするのも理解はできます。確かに、絵や音楽ならば子どもたちも楽しそうに一生懸命取り組んでくれるに違いありません。

しかし、「この教材で身につけさせたいのは」どの表現に注目し、何をどうすれば「理由」として挙げる「ことができるか」ということでしょう。この指導がある程度成された後に「学習活動」をもってやることは正しいと思いますが、難しいからといって「学習活動」だけで展開して終わりというのでは、国語の力をつける場面を逃したことになるのです。

そこで、「学習の姿」を見てほしいのですが、「文章を味わうときは、筆者の工夫し

た表現と、その効果に注目するのが一つの方法である。「とく」「森は、おおいかぶさるよう」にせまっています。「樹林が、ほくが森に入ることをこぼれているようにした。」を例に(またほかにもありますが)、擬人法(ここでは「森や樹林を人間のよう」に表現して)と説明しています。( )の効果を示しています。本来擬人法は「自分に引き寄せる、身近になる、一体化する」といった効果がありますから、本文の表現で言えば、21ページ「行目の」「森のこわさは、すっかり消えていました……動いているのです。」(特に、「森のこわさは、すっかり消えていました。」)という表現に結び付き、さらに作者星野氏の自然観をも表現しています。

もちろん、擬人法をナマのカタチで扱えと言っているわけではありません。六年生なりの、またその子なりのとらえ方でよいから「表現のすばらしさ」の一端をぜひ取り上げてほしいのです。

「学習活動」が中心では、子どもたちに国語科の「基礎・基本」を学ばせることにはなりません。あくまでも記述(表現)によらなければ国語科の学習にはならないことを胆に銘じ、その際、ぜひ「学習の姿」を活用してほしいと願っています。

最後に、「学習の姿」についてお願ひがあります。この「学習の姿」は、いわば「読み方」の方法(以前の「読解スキル」に近いかもしれませんが)を示したものです。この「読み方」の方法が子どもたち一人ひとりに蓄えられていったとき、「読むこと」が楽しくなるようにと工夫を凝らしているつもりです。「使っていく」「とか」「ちょっとおかしいのでは」と感じたときにはぜひ、「このようにしては」という案をお知らせください。日常の授業の中で生まれた案を生かしていきたいのです。私も現場で苦労していたとき、子どもたちがこの「読み方」の方法で納得したときの笑顔が忘れられません。いっしょに「基礎・基本」を考えていきましょ。